

特集展示「井伊直弼の茶の湯」作品リスト

	作品名称	員数	制作者	時代	指定	所蔵者
一期一会のころ						
1	いいなおすけがぞう 井伊直弼画像	1幅	狩野永岳	江戸時代	彦根市指定文化財	清凉寺
2	ちやのゆいちえしゆう 茶湯一会集	1冊	井伊直弼	江戸時代	重要文化財	当館 (彦根藩井伊家文書)
3	ちやのゆいちえしゆう(そうごう) 茶湯一会集(草稿)	1冊	井伊直弼	江戸時代	重要文化財	当館 (彦根藩井伊家文書)
先人への敬慕						
4	かたぎりせきしゆうがぞう 片桐石州画像	1幅	狩野永岳	江戸時代		当館
5	いいなおすけちやのゆたづねがき 井伊直弼茶湯尋書 かたぎりそうえんあて (片桐宗猿宛)	1通	井伊直弼	江戸時代 嘉永2年(1849)2月17日	重要文化財	当館 (彦根藩井伊家文書)
一派創立						
6	ちやのゆきんげんしく 茶湯三言四句	1幅	井伊直弼	江戸時代 弘化2年(1845)3月	重要文化財	当館 (彦根藩井伊家文書)
7	にゆうもんき 入門記	1巻	井伊直弼	江戸時代 弘化2年(1845)10月	重要文化財	当館 (彦根藩井伊家文書)
8	すみ しょ 炭の書	1綴	井伊直弼	江戸時代	重要文化財	当館 (彦根藩井伊家文書)
弟子への伝授						
9	ちやのゆていしゆうこころえへんがく 茶之湯亭主心得扁額	1面	井伊直弼	江戸時代		当館 (彦根藩井伊家文書)
10	ちやのゆいちえしゆう(しゃほん) 茶湯一会集(写本)	1冊	三浦安忠	江戸時代		当館 (三浦正也氏寄贈資料)
11	くろもじ 黒文字	22本		江戸時代		個人
ゆかりの茶道具						
12	たけいちじゆうざりはないけ めいち はじめ 竹一重切花生 銘千とせの始	1口	井伊直弼	江戸時代		当館 (井伊家伝来資料)
13	たけちやく めい (う)づき 竹茶杓 銘ゆふ月	1本	井伊直弼	江戸時代		当館 (三浦正也氏寄贈資料)
14	らくやきふたおき 楽焼蓋置	7箇	井伊直弼	江戸時代		当館 (井伊家伝来資料)
15	まげものくろうるしぬりりやまおけはないけ みずさし 曲物黒漆塗栗山桶花生・水指	各1口	井伊直弼	江戸時代		当館 (井伊家伝来資料)
16	ひこねみずやちよう 彦根水屋帳	1冊	井伊直弼	江戸時代	重要文化財	当館 (彦根藩井伊家文書)
17	わかかいし 和歌懐紙「くまのなる…」	1幅	井伊直弼	江戸時代		個人
18	こみしまいかもんちやわん 古三島印花文茶碗	1口		朝鮮・李朝時代		当館 (井伊家伝来資料)
19	つきなみちやき 月次茶器	12合	中村宗哲	江戸時代		個人
20	ことうやき きんらんでうんかくもんちやわん 湖東焼 金欄手雲鶴文茶碗	1口	幸齋(絵付)	江戸時代		当館 (井伊家伝来資料)

## 写真解説

### 1 茶湯一会集 1冊 (作品リストNO. 2)

井伊直弼 筆

江戸時代後期

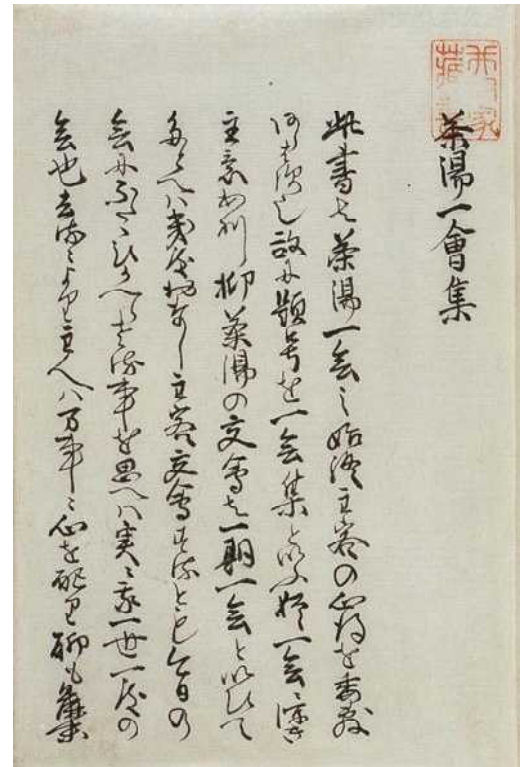
縦26.8cm 横19.2cm

重要文化財

当館蔵 (彦根藩井伊家文書)

井伊直弼が、自身の茶の湯の集大成として執筆した茶書。茶会の進行に添って、主客の所作や会話の内容、心構えを説くものです。推敲を重ね、安政4年(1857)頃に完成したと考えられています。

直弼は、茶の湯において、亭主と客の心の交流を最も大切に考えていました。それを一言であらわしたのが、この書の冒頭部分に記された「一期一会」という言葉です。この言葉には、一度の茶会での出会いは一生に一度のものであり、心を尽くして出会いの時を大切にしようという意味が込められています。この言葉は、現在、茶の湯の世界を超えて、人と人の出会いの本質を示す言葉として広く世に知られています。そのきっかけとなったのが、この「茶湯一会集」でした。



### 2 入門記 1巻 (作品リストNO. 7)

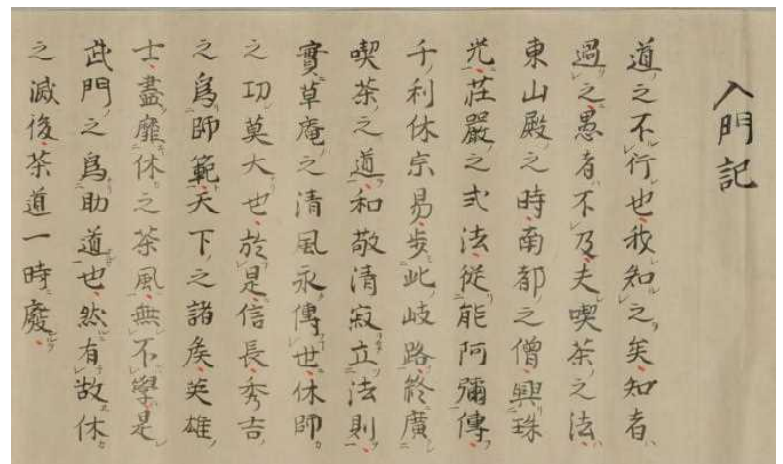
縦19.2cm 横265.0cm

井伊直弼 筆

江戸時代後期 弘化2年(1845年)10月

当館蔵 (彦根藩井伊家文書)

直弼31歳のときの書。冒頭で茶の湯の歴史を述べた上で、自らの一派を創立する宣言を記しています。そして、自流へ入門する者に対して、我意を離れ一心に修行すべきであると述べ、茶の湯の研鑽に志高くあれと綴っています。



3 <sup>くろもじ</sup>黒文字 22本 (作品リストNO. 11)

長15.6cm他

江戸時代後期

個人蔵

<sup>くろもじ</sup>黒文字は菓子を頂く際に使う小さな楊枝です。直弼の家臣であり、茶の湯の弟子でもあった<sup>うつぎかがよし</sup>宇津木景福が、直弼らとの茶会で用いたもので、裏面には、茶会の日時、場所、亭主の名前などが記されています。

黒文字は一度限りの使用で捨ててしまうのが一般的ですが、直弼は、茶会を思い出すよすがとして、その裏面に茶会の日時などを記して大切にしておくようにと、「茶湯一会集」(作品リストNO. 2)に記しています。

この黒文字は、直弼の教えに忠実に従い、研鑽を積む弟子の姿が垣間見える、貴重な品といえるでしょう。



4 <sup>つきなみちゃき</sup>月次茶器 <sup>なかむらそうてつ</sup>中村宗哲作 12口 (作品リストNO. 19)

高5.0~7.5cm 胴径5.5~9.2cm

江戸時代後期

個人蔵

直弼が自ら細かな注文を与えて制作させた12合揃いの<sup>うすちゃき</sup>薄茶器。千家十職の一家として知られる<sup>ぬし</sup>塗師、中村家8代宗哲が制作しました。

本品の意匠は、鎌倉時代の歌人<sup>ふじわらのていか</sup>藤原定家が十二月の花鳥を詠んだ「詠花鳥和歌」にちなんだもので、丁寧な塗りと細やかな線で表現されています。和歌を愛し、自らも多く詠んだ直弼らしい好みの作品です。



写真上) 月次茶器

写真下) 竹柳に鴛鴦蒔絵黒漆塗大棗

(月次茶器のうち 正月)